

# 「知恵の文化」の時代に向けて 技術こそ地球を救う

堺 屋 太 一  
Taichi SAKAIYA

## 今 「峠の時代」

今年 私はNHK大河ドラマ「峠の群像」の原作を書きました。

この原作「峠の群像」(NHK出版刊)は上中下の三巻本 全編2600枚の長編ですが これをお読みになる方は 中巻の終りまで読んで なお浅野内匠頭が生きているのに驚きと失望を感じられるかも知れません。大体「忠臣蔵」という物語は 浅野内匠頭が切腹する所からはじまるのですが 私の小説では全体の7割まで内匠頭は生きております。

それというのも 私がここで書こうとしたのは 赤穂事件 いわゆる「忠臣蔵」ではなくして 元禄という時代だったからです。

では 何故 今 元禄という時代を書く必要があるのか というと 元禄は一つの「峠の時代」であった。そして 現在 1980年代もまた一つの「峠の時代」だと考えるからです。

元禄時代というのは関ヶ原の合戦から約百年 徳川幕藩体制のもとで長い平和が続いたあとにきた時代です。この間に商品経済 貨幣経済が大いに発展し 徳川幕府が定めた農本的自給体制を掘りくずすほどになりました。つまり 元禄は停滞した「お米の経済」から発展する「お金の経済」に移行しようとした時代だったのです。

しかし 結局はいくつかの不幸な災害と財政難によって 古い体制にしがみついた武士階級の反動派が勢力を得「改革」という名の復古政治が行われるようになり 貨幣経済は抑圧されるようになります。つまり 「お米の経済」から「お金の経済」に移行しようとして切り切れず 世の中は下り坂に向ってしまったわけです。そしてそれから15年ほどあとには「享保の大不況」となり 年々何万人もの人々が餓死するような悲惨な時代がやってくるのです。「改革」「革新」の名によって行われた新井白石や将軍吉宗の農本主義の復帰政策は大きな損失を全国民に与えたわけです。

ところで 現在はどうのような「峠」かということ「石油文明」から「知恵の文化」へと移行しようとする「峠」だと私は考えております。戦後30余年続いて来た「石

油文明」が 今 ようやく頂上を極め下り坂に入った。そしてその次の時代を担う「知恵の文化」はまだ未成長といった所ではないでしょうか。

## 豊富な資源が築いた「石油文明」

戦後の世界は 大変経済成長の高い時代でした。中でも日本は あの「石油ショック」までの30年近く 年平均10%もの超高度成長を続けました。こんなことは人類5千年の歴史の中でも 戦後の日本以外どこにもなかったことです。

これほどの高度成長を生み出した原因は何か。勿論それにはいろいろありますが 最も重要なものの一つは世界的に資源エネルギーが豊富で安かったことでしょう。戦後 アラブ諸国を中心に次々と大油田が発見開発されたため まず石油があり余るようになり 価格も暴落しました。このため 石油はあらゆる所で使われるようになり 他のすべての資源をも余らせました。

例えば 石油化学によって合成繊維が安く大量に造られるようになったため 綿花や羊毛が余って来る。この結果 綿花畑が小麦や大豆に転作し 小麦も大豆も余る。羊を飼っていた牧場が牛を飼い出したので牛肉もバターも余る。加えて石油から安価な肥料や農薬が大量に製造されるので これを使って一反当たりの収穫も増えた。日本でもお米の反当たり収穫高は戦前の平均7割増にもなっています。世界の食糧・農産物の生産増はそれ以上です。

また 石油が安くなったので 大容量重油火力発電が行われ 電力料金が安くなりました。お陰で電気を使って作るものも安くなりました。アルミニウムはその典型です。このため アルミニウムがいろんな形で使われるようになり 銅や錫も余るようになったわけです。

このように 石油の豊富低廉さが エネルギー転換と化学工業を通じて あらゆる資源エネルギーを余らすようになったのです。これが世界の先進国 とりわけ日本には幸いしました。日本は国内に資源が乏しく国土も狭かったものですから どこからでも安いモノが輸入できたのです。モノがあり余っている状況では誰からでも買える人 いわゆる「フリーハンド」の買い手が得

をするのが世の常ですが 戦後の日本はその利益を存分に活用したといえるでしょう。

この結果 高度成長時代には日本では資源エネルギー多消費型の産業が大いに発展します。その代表は鉄鋼です。これほど資源集約的な産業は他になく これほど日本で成功した産業もありません。つい3年前までは日本の最大の輸出品は鉄でした。石油化学や造船(特にタンカー)なども 資源を沢山使う産業であり 日本が得意とした産業の一つでした。

### 資源多消費を良しとする風潮

ところが こうなると人々の考え方や生活様式も変わってくるのは当然です。

人間は誠に賢明な動物で いつの時代でも「あり余っているものを沢山使うのは格好がいい」という美意識を持ち 「不足なものを節約するのは正しい」という倫理感を持ちます。

戦争前 アラブ諸国で大油田が開発される前は 世界は資源不足だったので 国内資源の乏しい日本は大変不利で モノ不足に悩んでいました。このためモノを節約することが何よりも大事だと教えられたものです。その反面 当時は人手は豊富で賃金は安かったので 人を大勢使うことは格好のいいことでした。良家といわれる家には女中さんや書生さんが大勢いたし 商品の包装でも人手のかかったものが高級に見えたものです。ヨーカンやカステラが杉柁の箱に入っていたのはこのためでしょう。

しかし 戦後は資源が豊富になり 人件費が上がったので逆になりました。今は「モノを節約しろ」といっても 若い人には通じませんが 人手を節約する合理化に成功した経営者はみな「名経営者」と讃えられています。今日 格好のよい生活といえば お手伝いさんの多いことではなく 全館冷暖房の家に住み大型車を乗り廻すことです。高級品といわれる商品はみな何重にも資源で包まれています。

こうした資源多消費生活の行きつく先は大量生産大量消費の「使い捨文明」です。これこそ戦後高度成長が生み出した「石油文明」の極地といえるでしょう。

### 次に豊富になるのは「知恵」だ

しかし この「石油文明」にもようやくかげりが見えて来ました。あの「石油ショック」以来 資源エネルギーの豊富さが疑われるようになったからです。

1980年代に入る頃から 人々は資源エネルギーを沢山使うことは必ずしも格好よくないと考え出すようになりました。アメリカの大型車が嫌われ出したのも 全面ガラス張りのビルよりレンガ張りのビルが好まれ出したのもその現われといえるでしょう。このため 「石油文明」資源多消費型の生活を前提としてでき上った産業構造が大きく揺ぎ出しました。目下 ほとんどすべての素材産業が不況に陥ち込んでいるのもこのために違いありません。要するに 今一つの文明が下り坂に入ったということです。

では これからどうなるのか。人間性に変化のない限り やっぱり同じことが起るでしょう。つまり これからあり余ってくるものを沢山使うのが好まれるというわけです。

では これから豊富になるのは何か。それは知恵だと思います。知恵は教育の高度化とコンピュータなどの蓄積機能の普及で 急激に増大しているからです。

恐らく21世紀には 知恵を沢山使った商品が人々に飲ばれ 知恵を多消費する生活が賞讃されるようになるでしょう。

その反面 資源はますます貴重なものとなり 節約されるでしょう。今 一時的に石油は過剰になり 他の資源もあり余っているかに見えます。しかし 長期的にみれば やはりこれは足りなくなる傾向にあります。一時的な状況に惑わされることなく 技術の開発を進め 知恵を蓄える努力を積極的に続けることが 現代の「峠」を乗り切るために最も大切なことではないでしょうか。

新しい時代の流れを抑止止めようとするのは愚かなことです。人類を そしてこの美しい地球を救うのは より進んだ技術を駆使する人間の英知と勇気のほかにないと私は信じています。